

大槌学のすゝめ

⑥心の舵の取るにまかせむ

「平家物語」の冒頭、ご記憶の方、多いことでしょう。いや、悩まされた方が、でしょうか。

祇園精舎の鐘の声

諸行無常の響きあり

娑羅双樹の花の色

盛者必衰の理をあらはす

おごれる人も久しからず

唯春の夜の夢のごとし

たけき者も遂にはほろびぬ

偏に風の前の塵に同じ

一方、「方丈記」。

行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よとみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし。

これらが、大槌と、「大槌学のすゝめ」となにか関係あるの？と訝る方もおありかも。

良し津にも 悪しきところも身の船は

心の舵の取るにまかせむ

庵近く 植えし桜の咲くを観て 人知る

らめや花の心を

時く種の 生うるためしはみな人の 知れど空しくすべし世の中

「津」は、どうしても津波の印象があるでしょうけど、もともとは「湊」という意味。「良い湊に、或いはどうしようもないところに行き着くことも、自分自身を船に喩えるなら、心の持ちようなのでしょう、心の舵の取りようです」となりましょうか。

一部の紹介でしかありませんが、これらは、御社地を開いた、菊池祖晴の歌です。

祖晴和尚は、全国を行脚したのち、自身造営の東梅社における修行の傍ら、こうした思いを、経典書写の巻末や、掛け軸などに残しています。無情の世界観と捉えられるかもしれせん。けれども、未来への希望と受け止めることはできないでしょう。

「蓬莱島」は、もとは「珊瑚島」と呼ばれていたそうです。琵琶法師が語ったとされる「平家物語」。琵琶の標準的な大きさが三尺五寸だったこと、そして琵琶を抱える弁財天、それをお祀りしている島を、三尺五寸から、三と五、「さん」「ご」、珊瑚、珊瑚島、と呼んだ、とも言われていますが、確たる証拠はありません。

音楽が、あるひとときの時間を留めることができる「装置」であるとするなら、文学は或いは文字は、記憶を呼び起こすだけではなく、好奇心をかき立てる「媒体」でしょう。

盛者必衰の理、おごれる人も久しからず……、泡沫の恋、よとみに浮かんでいたのでしょうか。

祖晴和尚の教え、現代にも、そして未来にも通じることでしょう。

（大槌町教育委員会事務局 生涯学習課長 佐々木健）

編集後記

▼今月号は大槌祭り特集しています。祭りに参加できなかった人に、少しでも祭りの雰囲気や伝えられれば、と思いつながら作成しました。広報担当になり6カ月が経過しました。町民の皆さんに、行政情報をわかりやすく伝えることを心掛け、これからも頑張ります。（台野）▼今月号から、一部ページの取材から編集まで外部に委託し作成してもらいました。これから、目に見える復興事業が加速し、どんどん元気になっていく大槌を町民みなさんの視点から、より分かりやすく、より確実に発信していくことを目的としています。（花石）▼「大槌祭り」を3日間、追いかけて、郷土芸能を演じる団体の多さ、内容の多彩さに驚かされました。それぞれが、「おらが地元が一番」と思い、切磋琢磨していることが、エネルギーになっているのですね。祭りの盛り上がり、復興の力につながると信じています。（但木）



浮世絵師勝川春章の筆になる、町指定有形文化財「絹本着色 菊池祖晴画像」。裏面に、天明8（1788）年に画かれたとある。左端縦一行に、「庵ちかく・・・」、と記されている。長く菊池家に伝わってきたが、今回の震災で失われた。

写真は、花石公夫著、平成10（1998）年発行「閉伊の木食慈泉と祖晴」より。